している.〔結語〕難治性てんかんに対して側頭葉切除術が奏効した症例を報告した.

3. 筋萎縮性側索硬化症におけるグルタミナーゼの関与

（東京女子医科大学医学部 [1]病理学第一講座, [2]神経内科学講座）　柴田亮行[1]・猪瀬悠理[2]・遠井素乃[2]・川口素子[1]・廣井敦子[1]・山本智子[1]

筋萎縮性側索硬化症（ALS）において興奮性アミノ酸毒性の関与が指摘されている．我々は，グルタミンの脱アミノ反応を触媒してグルタミン酸を産生するグルタミナーゼ（GLS）に注目し，脊髄におけるGLSの発現を定量的ならびに形態学的に解析した.孤発性ALS群と年齢一致対照群の各10例から得られた剖検脊髄をもとに蛋白抽出物と凍結切片を作製し，イムノブロット解析と免疫組織化学染色に用いた．一次抗体は，マウス抗ヒトGLS抗体であり，免疫反応産物の検出は，ブロット上では化学発光法に，切片上ではポリマー免疫複合体法によった. GLS/β-actin免疫活性密度比は，対照群と比較してALS群で有意に上昇していた．GLS免疫活性は主にミクログリアに局在しており，ALS群で増強していた．ALS病巣に出現する活性化ミクログリアがGLSを過剰発現し，運動ニューロンにグルタミン酸毒性を及ぼす可能性が示唆された.

4. 一過性脳虚血発作の既往を有する脳梗塞患者の臨床的特徴と予後

（東京女子医科大学 [1]神経内科，[2]総合研究所）
星野岳郎[1]・水野聡子[1]・清水　悟[2]・内山真一郎[1]

〔背景〕一過性脳虚血発作（TIA）は重大な脳梗塞発症リスクとなることが知られるが，TIAの既往を有する脳梗塞患者の詳細な特徴は知られていない.〔対象と方法〕当科に入院した急性期脳梗塞連続506症例を対象とした後方視的研究.〔結果〕TIA既往患者は非既往患者に比べて，高血圧(76% vs 64%)，脂質異常症(57% vs 41%)，慢性腎臓病（28% vs 15%）を有する割合が有意に高く，アテローム血栓性脳梗塞が多かった(44% vs 28%). TIA発症後1週間以内の再発はアテローム血栓性脳梗塞が多い一方，1週間以降には心原性脳塞栓の割合が増加した．また1週間以降の再発は1週間以内の再発に比べてmodified Rankin Scale≧3例の割合が有意に高かった($p=0.005$)．多変量解析で「TIAの既往」は独立した予後不良因子であった(OR, 1.72；95%CI, 1.55-1.91).〔結語〕TIA既往患者は動脈硬化危険因子が重複したアテローム血栓性脳梗塞の再発が多かった．TIA後時間が経過して再発した脳梗塞は心原性脳塞栓，機能予後不良例が増加した.